

甘藷研究家「中馬克己」氏とその時代

旧九州農業試験場 甘藷交配研究室長 知識 敬道

本誌に「甘藷育苗法の変遷」、「甘藷貯蔵法の変遷」「各地方の甘藷栽培史」などの題名で健筆を振るっておられた中馬克己氏が昨年10月逝去された。戦前の数え方而言えば90歳であった。謹んで哀悼の意を表したい。

氏は1920年当時の鹿児島県曾於郡大崎町の生まれ。1941年12月戦時下の特別措置で鹿児島高等農林学校を繰り上げ卒業、その翌年2月現役兵として久留米の戦車49部隊に入隊。同年5月からは幹部候補生として旧満州で訓練。卒業後は戦車隊の小隊長として勤務。戦局の悪化に伴い1944年1月南海の孤島ウエーキ島に進出決戦に備えた。しかし戦局の悪化に伴い補給が途絶え、大本営や米軍にも見捨てられて飢餓の島となり、戦没者約3250人のうち戦死者は約150名、残りは殆どが「栄養失調死」と言う極限の状況を生き抜いて1945年10月に生還されている。

戦後はしばらく故郷で静養、1946年3月鹿児島県農事試験場に就職し、その年の11月から市内の紫原に設置されていた農林省指定の甘藷品種改良試験地へ転出、それが因縁で以後甘藷を中心とする九州での「畑作研究」の旅が続けられた。紫原時代は甘藷がまだ食用や澱粉原料として需要が多かった時代で、甘藷農林9号、アジヨシ、フクワセ、ナカムラサキ等は氏の在職中当時の期待に応じて送り出された新品種である。

1952年12月には長崎県農業試験場へ転出、傾斜がきつく重粘土壤で乾燥しやすく生産力の低い畑地帯の甘藷の生産性向上に努力を傾注された。1950年代も後半になると、政府買い入れの甘藷澱粉の滞貨が問題視されるようになったが、長崎県は水田が少なく沿岸島嶼部は甘藷と麦が主体で依然として重要な作物であった。当時はまだアルコール原料としての切干甘藷の生産も盛んで、切干甘藷の大産地である長崎県としては、その増産対策が大切な事業であった。長崎県での仕事は1958年までの短期間であったが、甘藷作の振興に傾注された。その努力が評価されたのであろう、試験場設立60周年記念式の同年9月「甘藷の麦間挿苗方式の確立」の功労者として県知事賞を受賞されている。

1958年6月には鹿児島県農試鹿屋支場へ転出、指定試験の「畑作改善研究室長」として当時の農林省が目指す「大型機械化一貫体系」による畑作物の生産費低減の研究に従事する。当時はまだ甘藷の全盛時代で1963年でも鹿児島県下の畑面積の56%が甘藷で、澱粉工場も380あり、衰退した現在の甘藷作からは想像も出来ないような盛況であった。しかしアルコール原料としては輸入品の糖蜜に負け、開発した「異性化糖」への用途も価格の安いコーンスターチに置き換わるなど、甘藷を取り巻く情勢は厳しくなりつつあった。その

起死回生の秘術が「大型機械による機械化一貫体系」による生産コスト引き下げであった。しかしこの研究成果を一般化するには畑の構造改善が必要であり、本場アメリカでも甘藷の機械化栽培には問題が多く、研究環境としては厳しい状況にあった。

当時農林省は関東と九州に畑作部を設置し、従来の水田一辺倒から畑作へと軌道修正を行い、宮崎県都城市に設置された畑作部と鹿屋とが共同してこの課題に取り組むことになった。その間農林省は機械化農業の先進地アメリカに大型の視察団を送ることを決め、それぞれの部署から専門家12名を選出、1959年7月26日出国、同年10月14日帰国の日程で調査を実施した。中馬氏もその団員に選ばれて、見聞を広めると共にその後の研究の進展に大きな影響を受けたと話しておられた。

鹿屋ではまず手始めに早期陸稲のドリル蒔き（1960～61）を試み、1960年度に大型トラクタトラクターや作業機が導入されると、これを使って甘藷の機械化に取り組み始めている。1964年1月には前記都城畑作部の作付け体系研究室長へ異動、これまでの蓄積が「甘藷機械化栽培指針」、「ナタネ機械化栽培指針」して纏められている。さらに1969年6月「中大型機を中心とする甘藷機械化栽培技術体系—南九州畑作地帯を中心とする—」が刊行され、次いで1970年8月には「小型機を中心とする甘藷の栽培技術体系」を刊行、コーンスターチ対抗策としての生産費低減を試みておられる。しかし「事志と違い」その後の甘藷の衰退をとめることは出来なかったことは周知のとおりである。

1971年5月再び古巣の鹿屋試場へ転勤、支場長として勤務。その間鹿屋支場は大隈支場と名称を変更、場所も鹿屋市から東のほうの串良町へ移動、試験場用地も拡大され面目を一新し1973年4月に開場した。氏はこれに伴う膨大な雑務を整理し新しい試験場の体制を整えて1978年5月定年退職の日を迎え、畑作の長い研究を終了されている。なお氏は自からは口外せず、また名刺等にも記載されていないが、1975年1月「南九州畑作地帯における早期陸稲を中心とする作付け体系の確立に関する研究」で九州大学から「農学博士」号を授与されている。

退職後は鹿児島市内に住み、近くの私立純真女子短期大学の教授として（1978～1993、さらに1994年まで非常勤講師）生物学、食品材料学、食品学、生活化学などを教え、若い女子学生に囲まれて楽しい生活を送っておられた。しかし不慣れな学校の授業や教材の整理に追われながらも甘藷との縁は切れず、統計資料から甘藷の生産が多かった市町村を狙って出かけたり、資料を収集整理し、その成果が本誌に連載されたことはご承知のとおりである。そして2002年にはこれまでの調査の集大成として「日本甘藷栽培史」を刊行された。

筆者は中馬氏に少し遅れて甘藷の道に入ったが、試験場生活の総てを育種だけで過ごしたので、幅広い知見を持つ先輩に教えられることが多かったことを今改めて思い出してこの文を綴っている。